

トルコ語の疑問文

—日本語との対照的研究にむけて—

吉村 大樹*

0. はじめに

本報告では、トルコ語の疑問文に関する形態・統語的ふるまいのうち、筆者の知る限り日本語との対照研究という点において問題となると思われる現象を指摘することにした。

現代トルコ語（以下、トルコ語）は語基に様々な種類の接辞が付加される、いわゆる膠着語的な性格を強く有することで知られている。また、統語論的には強い傾向で主要部が補語・付加語に後続するという特徴を有している。この点で、トルコ語と日本語は形態論・統語論的にきわめて類似した構造をしていると言える。その一方で、疑問文の構造、とりわけ yes-no 疑問文の構造において、(1)に提示したようにトルコ語には様々な日本語とは異なる現象が観察される。

- (1) a. トルコ語には疑問接語が文中に生起することがあり、日本語の「か」と比較してかなりの程度に自由である
- b. WH 疑問文では、(エコー疑問文を除いて) WH 詞と疑問接語は共起しない

以下、(1a)(1b)の点を中心に、音韻・形態、統語、意味の各レベルからトルコ語における疑問文のふるまいについての特徴をまとめ、日本語疑問文との対照研究における問題点を整理することとした。

* AA 研共同研究員／龍谷大学他非常勤講師。E-mail: a13277@mail.ryukoku.ac.jp
本報告の執筆に際して、先行研究による引用を除いた例文については、トルコ語の例文コンサルタント（男性、52歳）の判断を得た。同氏に心よりの謝意を表したい。なお、本報告の内容に関しては、報告者が全ての責任を負うことは言うまでもない。

1. 現代トルコ語の概略

本報告で言及するトルコ語は、チュルク諸語の分類上の観点では南西語群に属する言語である。同じく南西語群に属する言語にはアゼルバイジャン語、トルクメン語などがある。話者数は、トルコ共和国を中心に 6500 万人以上と推定されている。本節では、トルコ語の文法に関する大まかな特徴を紹介することとしたい。

まず音韻論上の特徴として、母音調和効果が挙げられる。トルコ語では、接辞や接語が直前の形式に膠着する時、その直前の音節の母音が有する音韻的特徴、すなわち前舌性の有無、円唇性の有無、また高母音性の有無という 3 つの媒介変数に応じて、自らの形式を決定する。たとえば、(2)はその一例である。

(2) a. gün-ler / kitap-lar (/e//a/の対立)

日-複 本-複

「日々」「(複数冊の)本」

b. ben-im ad-ım / ev-ım / göz-üm / kol-um (/i//i//y//u/の対立)

私-属格 名前-1単 家-1単 目-1単 腕-1単

「私の名前／家／目／腕」

(2a)では、ler, lar という 2 種の形式がそれぞれ複数であることを示している。この 2 種の形式の母音部分は、/e//a/とそれぞれ異なっている。この違いは、この接辞の直前の音節の母音によるものである。gün-ler の場合、直前の音節(gün)の母音部分は ü (音韻は/y/) であり、前舌性を有する母音である。このため、複数接辞の母音部分もそれに調和して e (音韻は/e/) となる。一方、kitap という名詞の最終母音は a で、前舌性は有していない。このため、複数形語尾の母音部分も、同じく前舌性を有しない a (/a/)が選択される。このように、母音部分が/e/または/a/のいずれかになる語尾とならんで、(2b)で示すように、母音部分が直前の形態素の母音の特質に応じて/i//i//y//u/のように 4 種類に変化する語尾がトルコ語には存在する。¹本報告で中心に述べる疑問接語は、後者に属する

¹ この母音部分を、トルコ語学の伝統的な音韻形態表記に従って大文字で A と表記することにする。また、/i//i//y//u/の 4 種類に変化する語尾の母音部分は、大文字 I で表記する。これにより、たとえば複数形接辞の場合は -IAr, 名詞句の主要部名詞に付加される 1 人称単数所有接辞は -Im と表記される。後述の疑問接語については、mi, mı, mü, mu の 4 種があることから、本報告では mI と表記することにした。

語尾の一種であると言える。

またトルコ語の形態論的特徴については、典型的な膠着型言語の特徴を有しているということができる。(3)の例はやや極端ではあるが、トルコ語の接辞や接語の形態的膠着の特徴をよく表している。この例で示されているように、接辞の膠着は派生接辞、屈折接辞、接語の順に行われるのが一般的である。

(3) **Çeko-slavakya-lı-laş-tır-a-ma-dık-lar-ımız-dan mı-sınız?**

チェコスロヴァキア-J派生-V派生-使役-不可能-否定-分詞-複数-1単-奪格 Q-2単

「(あなたは) われわれがチェコスロヴァキア人化できなかったうちの一人
ですか？」

なお、正書法上は多くの接辞と異なり、前の語とは分かち書きされる。本報告ではこの疑問（より厳密に言えば、yes/no 疑問）を表示する形式を、音韻・形態・統語的特徴から「疑問接語」と呼ぶことにしたい。

形態・統語的特徴の1つとして、主要部・依存語の二重標示言語であることも指摘しておきたい。(4)に示すように、たとえば属格名詞句では修飾語である属格名詞だけでなく、被修飾語である主要部名詞も形態的に所有接辞を標示する。

(4) **çocuğ-un baba-sı**

子ども-属格 父-3単

「(その) 子どもの父親」

トルコ語の統語論的特徴の1つは、基本語順がOV型であり、依存語（つまり、補語または付加語）が主要部に先行するという、強い主要部後置の傾向を有するということである。以下(5)では、2つの語どうしの語順関係についていくつかの代表的なパターンを提示してある。

(5) **a. sevimli çocuk (Adj. + N)**

かわいらしい 子ども

「かわいらしい子ども」

b. çok pahalı (Adv. + Adj.)

とても 高価な

「とても高価な」

c. Ben Japonca-yla uğraş-ıyor-um (N(subj.) + N (comp.) + V)

私 (主格) 日本語-具格 関わる-進行-1 単

「(私は) 日本語に関わっています (日本語をやっています)」

また従属節の動詞は、ペルシア語起源の接続詞を用いるようなパターンを除けば、分詞や動名詞の形式をとる（つまり、非定形化する）パターンが支配的である。後者のパターンによる複文では、(6)に示すように従属節が主節の述語に先行する。

(6) (Göksel and Kerslake 2005: 90-1)

a. [Sorun yarata-acağı] belli.

問題 生み出す-未来 明らかな

「(彼／彼女が) 問題を起こすであろうことは明らかだ」

b. [Sorun yarat-an] kuruluş-lar uyar-ıl-dı.

問題 生み出す-分詞形 組織-複 警告する-受身-過去

「問題を起こした組織は警告を受けた」

c. [Sorun yarat-maktansa] sonuç-lar-ı kabullen-di.

問題 生み出す-副動詞形 結果-複-対格 受け入れる-過去

「問題を起こすことを選ばず、(彼／彼女は)(その)結果を受け入れた」

以上がトルコ語の大まかな特徴であり、特に形態・統語的特徴について日本語と多くの共通点があることを示した。以下では、トルコ語における疑問文の実例を提示し、その形式的な諸特徴について論じることとしたい。

2. トルコ語の疑問文

2.1 yes/no 疑問文

本節では、まずトルコ語の yes/no 疑問文の形式的特徴を指摘する。これまで述べてきたように、トルコ語では yes/no 疑問文であることを表示するために疑

間接語 mI が用いられる。以下 2.1.1 節で、この疑問接語が文末（より正確に言えば主節の述語動詞形式の内部）に生起するときの形態・統語的ふるまいについて明らかにする。2.1.2 節では、疑問接語が文中に生起する現象について述べることにする。本節 2.1 節の構成から明らかなように、トルコ語の疑問接語の文法的ふるまいで最も重要な点は、話し手の疑問の焦点位置に応じて生起位置が変化するという点である。この点は、類似した機能を有する（と一見思われる）日本語の「か」や「の」等との対照を考慮する場合、特に重要になる。

2.1.1 文末（主節の動詞複合形式内部）に疑問接語が生起する場合

すでに述べた通り、トルコ語では yes/no 疑問文であることを表すために、疑問接語 mI を用いる。(7)は yes/no 疑問文の一例で、話し手が聞き手に、発話時の翌日にイスタンブルに行くか行かないかを質問している。述語動詞部分は、動詞語幹の後にテンス／アスペクト／モダリティ（のいずれかの、あるいはそれら複数を同時に表す）要素を表す接辞（以下、TAM 接辞と称する）が後続する。疑問接語はその後に生起し、人称接語（接語代名詞）がさらに後続する。

(7) Sen yarın İstanbul-a gid-ecek mi-sin?
君 明日 イスタンブル-与格 行く-未来 Q-2 単

「君は明日イスタンブルに行く予定ですか？」

なお、動詞の時制／アスペクト（／ムード）の種類により、人称語尾形式との相対的位置が異なる。たとえば(8)の例では、(7)の例とは異なり、TAM 接辞に定過去接辞が用いられている。この形式が選択された場合、まず人称語尾が先行し、疑問接語はそれに後続する。この順序は厳密であり、前後を逆にした場合は非文法的になる(*git-ti mi-n)。

(8) a. Sen geçen hafta İstanbul-a git-ti-n mi? /*git-ti mi-n?
君 先週 イスタンブル-与格 行く-過去-2 単 Q / 行く-過去-Q-2 単

「君は先週イスタンブルに行ったの？」

b. Sen her sabah kahvaltı yap-ıyor mu-sun? /*yap-ıyor-sun mu?
君 毎朝 朝食 する-進行 Q-2 単 / する-進行-2 単 Q

「君は毎朝朝食をとっていますか？」

(7)(8)に代表されるように、トルコ語では、動詞の TAM 接辞が過去形・仮定形の場合は人称語尾が常に疑問接語に先行する。一方で未来形、現在進行形等の TAM 接辞が用いられる場合は、疑問接語が先行し、人称語尾はそれに後続する。² この疑問接語と人称語尾の相対的な順序の違いは、系列ごとの人称語尾の形式の形式的特性が影響していると考えられる。すなわち以下表 1 で示したように、(7)で提示した例のような z 系列の人称語尾は接語代名詞(pronominal clitic)、その他の系列の人称語尾は屈折接辞(inflectional suffix)である(cf. Good and Yu 2005)。この区別が正しければ、接語化は屈折接辞の「外側」で生じるといふ通言語的な傾向として説明できる。

系列／人称・数	k 系列	z 系列	希求法	命令法
1 人称単数	-m	-(y)Im	-(y)EyIm	--
2 人称単数	-n	-sIn	-(y)EsIn	(null), -sEnE (familiar) -(y)In, -(y)InIz, -sEnIzE (formal)
3 人称単数	--	--	-sIn	-sIn
1 人称複数	-k	-(y)Iz	-(y)ElIm	--
2 人称複数	-nIz	-sInIz	-(y)EsInIz	-(y)InIz
3 人称複数	-lEr	-lEr	-sInlEr	-sInlEr

表 1: トルコ語における人称語尾の系列

これに加えて、ある動詞語幹に 2 つの TAM 接辞が後続するような、複合動詞時制の場合についても指摘しておきたい。たとえば以下の(9a)(9b)では、動詞語幹に 2 つの定過去形接辞が後続することによって、過去完了の文法的意味が表されている。このようにトルコ語では、2 つ（場合によってはそれ以上）の TAM 形式が同時に用いられることによって、単独の TAM 接辞だけでは表すこ

² ただし、いわゆるエコー疑問文の場合はこの形態・統語的順序が変更される場合がある。これについては 3.1 節で触れることとする。

とができない文法的意味を表すことができる。この場合も接辞・接語の順序はかなりの程度に厳密に定められている。すなわち、動詞語幹にまず1つ目の TAM 接辞が後続し、さらに疑問文の場合は疑間接語、助動詞、2つ目の TAM 接辞、そして最後に主語を示す人称語尾が後続する。

(9) a. **git-ti-y-di-m**

行く-過去-助動詞-過去-1 単

「(その時) 私はもう行ってしまっていた」

b. **git-ti mi-y-di-n? / *git-ti-y-di-n mi?**

行く-過去 Q-助動詞-過去-2 単 / 行く-過去-助動詞-過去-2 単 Q

「(その時) 君はもう行ってしまっていたの？」

2.1.2 文中に生起するトルコ語の疑間接語

トルコ語の疑間接語 **mI** は文末だけでなく、文中にも生起する。このことにより、話し手は質問したい部分（これを本報告では以下「焦点」(フォーカス)と呼ぶことにする)を限定することができる。つまり、話し手が特定の要素だけを聞き手に質問したいときに、疑間接語を焦点化したい部分の直後に生起させる。

(10) a. **Ali kitab-1 Ayşe-ye ver-di mi?**

アリ 本-対格 アイシエ-与格 与える-過去 Q

「アリは(その)本をアイシエにあげたの？」

b. **Ali kitab-1 Ayşe-ye mi ver-di?**

アリ 本-対格 アイシエ-与格-Q 与える-過去 Q

「アリはその本をアイシエにあげたの？」

c. **Ali kitab-1 m1 Ayşe-ye ver-di?**

アリ 本-対格 アイシエ-与格 与える-過去 Q

「アリはその本をアイシエにあげたの？」

d. **Ali mi kitab-1 Ayşe-ye ver-di**

アリ Q 本-対格 アイシエ-与格 与える-過去

「アリが(その)本をアイシエにあげたの？」

管見の限り、他のチュルク諸語では文中に疑問接語が生起するような現象は見られない。たとえばトルコ語と同じくチュルク諸語の1つであるウズベク語では、話し手が特定の部分だけを疑問の焦点として限定したい場合であっても、疑問接語は文末（述語部分）にのみ生起し、特定の構成素に韻律上の焦点（フォーカス）を与える（cf. 吉村 (2012)）。

(11) a. Dilshod kitob-ni Anor-ga ber-di-mi?
 ディルショド 本-対格 アノル-与格 与える-過去-Q

「ディルショドは本をアノルに渡しましたか？」

b. */??Dilshod kitob-ni Anor-ga-mi ber-di?
 ディルショド 本-対格 アノル-与格-Q 与える-過去

（意図：「ディルショドは本をアノルに渡しましたか？」）

c. */?? Dilshod kitob-ni-mi Anor-ga ber-di?
 ディルショド 本-対格-Q アノル-与格 与える-過去

（意図：「ディルショドは本をアノルに渡しましたか？」）

d. */?? Dilshod-mi kitob-ni Anor-ga ber-di?
 ディルショド-Q 本-対格 アノル-与格 与える-過去

（意図：「ディルショドが本をアノルに渡しましたか？」）

（吉村 2012: 94）

なお、yes-no 疑問の（疑似）分裂文による表現は、埋め込み節と主節述語名詞の間にポーズを置くことで一応可能である。³mi の文中生起とどちらがより多用されているか、統計上明確な資料があるわけではないが、(10)のような例と(12)のような語順をとる場合との関連性は今後詳細な分析が必要であると思われる。⁴

³ (10)の例文を判断してくださったトルコ語インフォーマント A 氏（匿名：男性）に謝意を表す。

⁴ トルコ語には it や there などの虚辞が存在しないため、(10)に挙げられたものも含めたあくまで疑似分裂文であると Kornfilt (1997: 192-3)で指摘されている。

- (12) a. Ali-nin kitab-ı ver-diğ-i, Ayşe mi? / *Ayşe-ye mi?
 アリ-属格 本-対格 与える-分詞-3 単 アイシエ Q / アイシエ-与格 Q
 「アリが本をあげたのはアイシエですか？」
- a'. Ali-nin kitab-ı ver-diğ-i kişi Ayşe mi?
 アリ-属格 本-対格 与える-分詞-3 単 人 アイシエ Q
 「アリが本をあげた人はアイシエですか？」
- b. Ali-nin Ayşe-ye ver-diğ-i, kitap mı?
 アリ-属格 アイシエ-与格 与える-分詞-3sg 本 Q
 「アリがアイシエにあげたのは本ですか？」
- b'. Ali-nin Ayşe-ye ver-diğ-i şey kitap mı?
 アリ-属格 アイシエ-与格 与える-分詞-3 単 もの 本 Q
 「アリがアイシエにあげたのは本ですか？」
- b''. *Ali-nin Ayşe-ye ver-diğ-i şey kitab-ı mı?
 アリ-属格 アイシエ-与格 与える-分詞-3 単 もの 本-対格 Q
 (意図した読み: 「アリがアイシエにあげたのは本をですか?」)
- c. Kitab-ı Ayşe-ye ver-en^{??}(,) Ali mi?
 本-対格 アイシエ-与格 与える-分詞 アリ Q
 「(その) 本をアイシエにあげたのはアリですか？」

さらに指摘しておきたいのは、トルコ語の疑問接語が複文の内部にも生起可能ということである。以下に示した(13)の例からそのことは明らかである。とりわけ(13b)において、疑問接語が従属節の中に生起しつつ、構文が文法的であることがわかる。ここで明らかになる問題点は、**mI** が文中に生起する場合における疑問のスキープの広さと、話し手による疑問の焦点位置である。すなわち、(13b)やこれまで見てきた(10b)(10c)(10d)のような例では、疑問のスキープ自体は文全体にかかっているが、話し手の疑問の焦点は限定的である。どのような文法理論的枠組みを使用するにせよ、スキープと焦点の関係、およびそれぞれの概念について説明する必要が出てくる。

- (13) a. Aynur [Zehra-yla buluş-tuk-tan sonra] mı çocuk-lar-ı
 アイヌル ゼフラ-共格 会う-分詞-奪格 後 Q 子ども-複数-対格
 okul-dan al-dı?
 学校-奪格 得る-過去
 「アイヌルはゼフラと会ってから子供たちを学校で拾ったのですか？」
- b. Aynur [Zehra-yla mı buluş-tuk-tan sonra]
 アイヌル ゼフラ-共格 Q 会う-分詞-奪格 後
 çocuk-lar-ı okul-dan al-dı?
 子ども-複数-対格 学校-奪格 得る-過去
 「アイヌルはゼフラと会ってから子供たちを学校で拾ったのですか？」
- (Göksel and Kerslake 2005:293)

以上の問題に関連して、疑問のスコープが文全体ではなく、従属節内部のみに限定される可能性も当然ありうる。以下(14)のように、疑問接語自体は(13)と同じく文中に生起しているが、(13)の場合とは異なり、疑問のスコープが文全体ではなく従属節内部に限定される場合がそれに該当する(cf. Hayasi 1984)。

- (14) a. [Fatma-nın İstanbul-a gid-ip git-me-diğ-i]-ni
 ファトマ-属格 イスタンブル-与格 行く-副動詞形 行く-否定-分詞-3単-対格
 bil-mi-yor-um.
 知る-否定-進行-1単
 「ファトマがイスタンブルに行ったかどうか、私は知らない」
- b. [Fatma İstanbul-a git-ti mi]
 ファトマ イスタンブル-与格 行く-過去 Q
 bil-mi-yor-um.
 知る-否定-進行-1単
 「ファトマがイスタンブルに行ったか、私は知らない」
- c. [Fatma İstanbul-a git-ti mi git-me-di mi]
 ファトマ イスタンブル-与格 行く-過去 Q 行く-否定-過去 Q
 bil-mi-yor-um.
 知る-否定-進行-1単

「ファトマがイスタンブルに行ったか行かなかったか、私は知らない」

疑問接語の生起位置については、さらに様々なトピックが存在する可能性があるが、本報告では現時点で報告者が言及できる範囲の現象のみを提示している。それでもここまで明らかになったこととして、(13)と(14)の例などから、トルコ語の疑問のスコープおよび焦点をどのように説明するかという問題があることは間違いない。また、従属節内部に疑問接語が生起しつつ、スコープが文全体にわたる場合と従属節のみにとどまる場合とが存在することが明らかになった。はたして統語構造が互いに異なっていると言えるかどうかは今後検証されなければならないであろう。もし、統語構造が異なるとすれば、それをどのように記述・説明するのがよいかについても今後検討する必要がある。

2.2 WH 疑問文

本節では、トルコ語の WH 疑問文（疑問詞疑問文）について概観する。トルコ語の WH 疑問文では、疑問詞を用いることで WH 疑問文であることを表す。主要な疑問詞として、ひとまず以下のものを(15)に挙げておくことにする。

- (15)
- a. ne 「何」
 - b. kim 「誰」
 - c. ne zaman 「いつ」
 - d. nerede 「どこで」
 - e. nasıl 「どのように」
 - f. hangi 「どの」
 - g. kaç 「いくつ」

トルコ語はいわゆる、疑問詞が元位置にとどまる(WH-in-situ)言語である。すなわち、(16)の各例から明らかなように、疑問詞が文頭に生起するなどの統語的操作は義務的ではない。

- (16)
- | | | | |
|----|-----|----|------------------|
| a. | Sen | ne | iç-er-sin (*mi)? |
| | 2 単 | 何 | 飲む-中立-2 単 (Q) |

「君は何を飲みますか？」

b. Kim İstanbul-a gid-ecek?

誰 イスタンブル-与格 行く-未来

「誰がイスタンブルに行く予定ですか？」

c. Serkan ne zaman geri dön-dü?

セルカン 何 時 戻って 帰る-過去

「セルカンはいつ戻ってきたの？」

d. Pardon, Osaka Üniversite-si nere-de?

失礼 大阪 大学-3 単 どこ-位格

「すみません、大阪大学はどこですか？」

e. Semra-nın ev-i-ne nasıl gid-il-iyor?

セムラ-属格 家-3 単-与格 どのように 行く-受身-進行

「セムラの家にはどうやって行きますか？」

(Göksel and Kerslake 2005: 303)

f. Sınıf-ta kaç kişi var?

教室-位格 いくつ 人 いる

「教室には何人いますか？」

また、日本語の疑問詞疑問文と対照する際の重要な違いとして、通常疑問詞疑問文では、トルコ語では疑問詞と疑問接語は共起しないという点を指摘しておきたい。共起する場合、疑問接語は WH 詞の直後（または WH 詞が述語の直接的な構成素でない場合は、その構成素の主要部の直後）に生起し、文の読みはいわゆる聞き返しの疑問文（エコー疑問文）としてしか解釈されない(cf. Kornfilt 1997)

(17) Kim Türk? / !Kim Türk mü? / !Kim mi Türk?

誰 トルコ人 誰 トルコ人 Q 誰 Q トルコ人

「誰がトルコ人なの？」 / 「誰がトルコ人かって（言ったのか）？」

したがって、上で提示した(17)のように聞き返しの意図を話し手が持たない限り、トルコ語では疑問詞だけを文中に生起させることになる。

また、(疑似) 分裂文による WH 疑問文はトルコ語でも一応存在する。ただし、以下(18)に示すように yes/no 疑問文の場合と同様、義務的な統語的操作ではない。

- (18) a. Dün sinema-ya gid-en, kim-di?
 昨日 映画館-与格 行く-分詞 誰-過去
 「昨日映画館に行ったのは誰ですか？」 (Kornfilt 1997: 29)
- b. Kim dün sinema-ya git-ti?
 誰 昨日 映画館-与格 行く-過去
 「誰が昨日映画館に行ったのですか？」
- c. Ahmed-in dün sinema-da gör-dük-leri, kim-(ler)-di?
 アフメト-属格 昨日 映画館-位格 見る-分詞-3 複 誰-(複数)-過去
 「アフメトが昨日映画館で見たのは誰(と誰)でしたか？」
 (Kornfilt 1997: 29)
- d. Ahmet dün sinema-da kim-(ler)-i gör-dü?
 アフメト 昨日 映画館-位格 誰-(複数)-対格 見る-過去
 「アフメトは昨日映画館で誰を見ましたか？」

複文における WH 詞のスコープも、yes/no 疑問文の場合と同じく、記述的・理論的な問題として存在していると思われる。なお、以下(19)の和訳部分の下線は、報告者によるもので、話し手が質問したい部分を表示するために用いている。以下の例文でも同様の意図を示すために下線部を用いる。

- (19) a. Ali [ne-yi Ayşe-nin oku-duğ-u]-nu
 アリ 何-対格 アイシエ-属格 読む-分詞-3 単-対格
 bil-mi-yor-muş.
 知る-否定-進行-不定過去
 「アリは何をアイシエが読んだか知らないらしい」 (Uzun 2000: 311)
- b. Ne-yi [Ali Ayşe'nin oku-duğ-u]-nu
 アリ 何-対格 アイシエ-属格 読む-分詞-3 単-対格

bil-mi-yor-muş?

知る-否定-進行-不定過去

「アリはアイシェが何を読んだか知らないって？」 (Uzun 2000: 311)

- (20) [Fatma-nın nere-ye git-tiğ-i]-ni bil-mi-yor-um.
ファトマ-属格 どこ-与格 行く-分詞-3 単-対格 知る-否定-進行-1 単
「ファトマがどこへ行ったか、私は知らない」

(19a)(19b)の対照から明らかなように、疑問詞が従属節の内部にとどまるか、それとも従属節の外側に生起するかによって、疑問のスコープが変化するということが Uzun (2000)で指摘されている。このことは、前節で見たトルコ語の yes/no 疑問文のスコープの問題と並行している可能性がある。すなわち、yes/no 疑問文で義務的に生起する疑問接語 mI が従属節の内部にとどまっていれば、mI を統語的に支配している場所がどこか(従属節内なのかそれとも主節なのか)によって疑問のスコープが変わってくる、ということである。

3. 理論上・記述上の諸問題

前節をふまえて、本節ではトルコ語と日本語の疑問文の対照研究に向けた問題点をもう一度整理しておきたい。まず 3.1 節で、トルコ語特有の様々な疑問に関する問題点を提示する。その後 3.2 節で、日本語との対照研究を視野に入れた場合に浮かび上がる問題点について指摘する。

3.1 トルコ語独自の問題

トルコ語固有の問題はいくつか考えられるが、疑問文に関する問題として以下のようなものが考えられる。まず、音韻・形態レベルにおいて、疑問接語が直前の語の最終音節の母音に対して母音調和することをどう説明するかということである。すでに指摘したように、トルコ語の接辞、特に派生接辞・屈折接辞は、最終的にどのタイプの母音で具現化されるかを母音調和効果によって決定される。トルコ語の疑問接語もこの母音調和の規則に従い、直前の語の最終音節に従って母音調和することを前節で確認した。ここで注意すべきことは、多くの派生接辞・屈折接辞と異なり、疑問接語が形態・統語的な何らかの

置詞句の姉妹位置に基底生成されるが、述語動詞形式に隣接、または述語動詞内部に生起する場合、動詞句の主要部の補語位置に基底生成されるという分析を提案している。また Yücel (2012)は、疑問文であることを明示するために「音調形態素」(intonation morpheme)という理論的な概念を利用し、この要素が補文標識句(CP)内にあり、文中にある疑間接語の Q 素性を制御しているという枠組みを提示している。ただし、Besler (2000)の分析は文中に生起する場合の mI は統語的独立性の強い接語である一方、文末に生起する場合は mI は屈折接辞として扱われることになり、生起位置の違いで形態・統語的なサイズが異なるという二重標準的な分析になってしまうという問題が指摘されている(cf. Yücel 2012, Yoshimura 2012)。一方で Yücel (2012)の分析も、それ自体は(21b)(21c)のような非文法的な構文を排除するような理論的枠組みを提示していない。この2人の分析以外には、Yoshimura (2012)が依存文法の枠組みで疑間接語の生起位置を予測しているが、どの理論的枠組みがより優れた分析を提示することができるのかも、今後の検討課題であると思われる。

統語論に関連するトピックとしては、mI の直前の語、および述語動詞との統語関係（すなわちそれぞれの要素の主要部は何か、どこにあるか）に様々な分析の可能性が残されていることが挙げられる。また、Q 要素が移動するという仮説をふまえ(cf. Hagstrom 1999:1)、Aygen (2007)や前述の Yücel (2012)では、トルコ語でも疑間接語が節の内部(clause-internal position)から周縁部 (clause-periphery)に移動していると主張している。Aygen (2007)はこの Hagstrom (1999)の考えを踏まえて、トルコ語では Q 移動は LF レヴェルで行われる潜在的移動(covert movement)であり、yes-no 疑問文またはエコー疑問文の時にのみ顕在化するという考えを提示している。前述の Yücel (2012)も、カートグラフィーを利用する立場を新たに導入しつつ、Aygen (2007)の考え方になっている。この路線に基づく分析の妥当性については本報告では論じないことにしたいが、前述の通り統語的位置が不適格な場合の非文法性をどのように説明するかが重要な課題となると思われる。

最後に統語論上のトピックとして、mI の生起位置と、疑問の焦点位置の mismatches が生じる場合があることを指摘したい。以下(22a)の例では、疑間接語が文末ではなく、述語の直前語に前接するとき、結果的には文中に生起していることになる。それににもかかわらず、疑問の焦点は疑間接語が前接している語

に限定されず、文全体にかかるという指摘がなされている (Zimmer 1997, Göksel and Kerslake 2005)。

(22) a. Nermin okul-a mı git-miş?
ネルミン 学校-与格 Q 行く-不定過去

「ネルミンは学校に行ったの？」

b. Nermin okul-a git-miş mi?
ネルミン 学校-与格 行く-不定過去 Q

「ネルミンは学校に行ったの？」

(22a)(22b)いずれも、疑問の焦点は文全体にかかっていることが上記の先行研究で指摘されている。(22a)が今問題となっている例で、Göksel and Kerslake (2005)によると、話し手が非言語的な手がかり（発話場面の状況等）から、聞き手に質問する内容についてなんらかの想定をしている場合は(22b)ではなく(22a)のほうが自然である。このような例が存在することは、疑問接語の生起位置以外の何らかの要素が、疑問文の構造に影響を及ぼしていることを示している。報告者自身は、この現象は意味構造のレベルで説明がなされるべきことであると現段階では考えている。いずれにせよ、この現象を説明する枠組みの構築も今後の課題である。

また、以下のような現象も発話行為と形態・統語論が相互に関連する問題として興味深いと思われる。(23)の例で、本来なら話者Bの発話における *gidiyorum mu* は形態（・統語）的には許容されないはずである (cf. (8b))。しかし、(Kornfilt 1997: 32-33)が指摘するように、実際には文法的である。

(23) Speaker A: Sinema-ya gid-iyor-um.
映画館-与格 行く-進行-1 単

「映画館に行ってきます」

Speaker B: Sinema-ya gid-iyor-um mu de-di-n?
映画館-与格 行く-進行-1 単 Q 言う-過去-2 単

「『映画館に行ってきます』って言ったの？」 (Kornfilt 1997: 33)

(23)の例は問い返しという発話行為が、形態・統語論に直接的に影響を及ぼしていると思われる例であり、この現象を理論的にどのように説明するか、管見の限りでは研究がなされていない。

最後に、意味と発話行為の問題についてもまとめておきたい。これまで見てきたように疑間接語 **mI** によってどこが焦点化されるかを説明する枠組みが必要である。また、疑問のスコープの広さをどのように説明するかも、Yücel (2012) に代表されるような分離補文標識句仮説の妥当性も含めて今後検証する必要があるであろう。

3.2 日本語との対照について

前節まで、主にトルコ語における疑間接語(**mI**)にまつわるいくつかの課題を明らかにした。本節では、日本語の疑問文との対照をふまえる際に浮かび上がる問題点を明らかにしてみたい。

まず、日本語における「か」の音韻・形態的ステータスの対照について指摘してみたい。これまで見てきたように、トルコ語の **mI** は統語的には他の語と独立した単位でありながら、形態論上は接語形式と直前の語形から形成されるより大きな語形の一部であり、典型的な「接語」(clitic; Erdal 2000, Sezer 2001 他)であるといえる。一方、機能的に類似しており、対照研究の直接的な対象は「か」と想定してよいかどうかは検証が必要であるだろう。そうであれば、**mI** と同じく音韻・形態上の単位として「疑間接語」とであるということは果たして可能か、という議論がより詳細に行われる必要がある。

また、**mI** と日本語の疑問文マーカの生起の制約の対照も重要なトピックであると思われる。すなわち、トルコ語では疑間接語の生起に動詞形式の制約はない。ただし、動詞のテンス・アスペクト形式の種類により人称語尾との相対的位置をどのように説明するかという問題がある。一方よく知られているように、日本語の「か」が生起するときは、以下(24)で示すように、動詞形式に制約がかかる場合がある。

(24) 明日のパーティーには誰が来る {*か／の}。

また、統語的位置とスコープとの関連についても議論が必要である。日本語

の『か』のスコープはそれが付加されている動詞・形容詞・『名詞／形容動詞＋だ』に限られることが指摘されている (cf. 田窪 2011、金水 2013)。

- (25) a. ??君は一九二〇年に生まれたか。
a'. 君は [一九二〇年に生まれたの] か。
b. ??君はこの時計をパリで買ったか。

(25a)(25c)の例が不自然であることはトルコ語の類似例とは対照的であり、両言語の統語構造になんらかの違いがある可能性が高い。

また、スコープと焦点についての課題も指摘できる。日本語では間接疑問文を示すのに「かどうか」が使用される一方、トルコ語では疑問接語や WH 詞を使用せずに選択的な間接疑問文を表すことが可能である(14a)(26b)。

- (26) a. [お父さんが来年家を建てるかどうか]、私は知りません。
b. [Baba-m-ın gelecek yıl ev yap-ıp yap-ma-yacağ-ı]-nı
父-1 単-属格 来年 家 作る-副 作る-否定-未来-3sg-対格
bil-mi-yor-um.
知る-否定-進行-1 単

「お父さんが来年家を建てるかどうか、私は知りません」

ここでは前掲(13)の例のように mI が従属節内部に生起している場合で、疑問の焦点は特定の語（または構成素）に限定されていながら疑問のスコープは文全体にかかるような例を考慮に入れる必要がある。これが日本語にはない現象であるとするれば、やはりなぜそのような違いが生じるのかを検討する必要性が生じるであろう。

スコープの広さの表示の仕方についても、トルコ語と日本語の対照研究の範囲に含まれる。上述したように、日本語の疑問のスコープは、それが付加されている動詞・形容詞・「名詞／形容動詞＋だ」に限られることが指摘されている (田窪 2011、金水 2013)。一方、これまで見てきたように、疑問接語が後置詞に付加されていながら疑問のスコープが文全体にかかっている(13a)のような例、ならびに疑問接語の位置が表面上同じであるにもかかわらず、疑問のスコ

ープの範囲が異なる(19a,b)のようなトルコ語の例は、日本語の疑問のスキープの説明がそのままトルコ語の疑問文のスキープの説明に適用できないことを示している。両言語に同様に適用できる説明の枠組みは今後の重要な課題である。

この他の対照研究のトピックとして、日本語の「なぜ」とトルコ語の *neden/niye/niçin*（「なぜ」）の対照を挙げることができるであろう。すなわち、日本語の「なぜ・どうして」による疑問詞疑問文は基本的に「の」が必須である(cf. 野田 1995)が、トルコ語では「なぜ」に相当する WH 詞(*neden/niye/niçin*)が用いられる場合でも、述語形式はそれに呼応する「の」のような特定の形式があるわけではない。また、*neden/niye/niçin* 等の疑問詞と *mI* も、やはり（エコー疑問文を除けば）共起しない。

(27) a. なぜこのプロジェクトに参加した [の/??ø] ?

b. *Neden bu proje-ye katıl-dı-n?*
なぜ この プロジェクト-与格 参加する-過去-2 単

「なぜこのプロジェクトに参加したの（君）？」

ここまで、報告者が現段階で思いつく限りのトルコ語と日本語とを対照する上で問題になると思われるトピックを提示した。今後の研究プロジェクトでは、上述のトピックについて報告者自身も何らかの回答を提示することにしたいが、これ以外にも報告者が見落としているトピックが多数に存在する可能性は十分考えられる。

4. おわりに

以上、トルコ語の疑問文に関連する諸問題を指摘し、その上で報告者が現段階で思いつく限りの日本語との対照研究にむけたポイントを整理してきた。

最後に、上記のトピック以外に研究が発展する可能性として、トルコ語以外のチュルク諸語を研究対象にすることを提案しておきたい。トルコ国内にもさまざまなトルコ語の地域方言によるバリエーションが存在する。このうちたとえば北キプロスで話されているとされる、いわゆるキプロス方言では、本報告で述べてきたような疑間接語が *yes/no* 疑問文で用いられず、純粋に焦点化され

る要素を韻律的に強調することで疑問文を表示する傾向がある、という指摘がある(Demir 2009: 23)。同様の現象は、トルコ語と同じくチュルク諸語の1つのアゼルバイジャン語にも観察されるという(Demir 2009: 24)。⁶その観察が妥当かどうかという問題に加えて、本報告で提示してきたような複文の疑問文の構造はどのように表示されるのかなど、日本語との対照という点においても興味深い成果が出る可能性がある。また、本報告の例文で主に提示した、トルコ語を除く多くのチュルク諸語では、トルコ語と異なり疑問接語が文中に生起することがないとされている。そのような言語において、疑問の焦点位置、および疑問のスコープをどのように表示しているのかについても、今後調査することで、日本語との対照研究の可能性が広がってくる可能性も最後に指摘しておきたい。

参考文献

- Aygen, Gülşat (2007). Q-particle. *Journal of Linguistics and Literature* 4-1, Mersin University, 1-30.
- Besler, Dilek (2000). *The Question Particle and Movement in Turkish*. Unpublished MA thesis, Boğaziçi University.
- Demir, Nurettin (2009). Kıbrıs Ağızlarındaki Tipik Özellikleri. (「トルコ語キプロス方言における典型的な諸特徴」.) Öztürk, Rıdvan (ed.) *Kıbrıs Konuşuyor: Kıbrıs Ağzı Üzerine İncelemeler*. (『キプロスは語る：キプロス方言に関する研究』) İstanbul: Kesit Yayınları. 17-28.
- Dryer, Matthew S. (2005). Polar questions. In Haspelmath M. (et al.), *The World Atlas of Language Structures*. Oxford: Oxford University Press. 374-377.
- Göksel, Aslı and Kerslake, Celia (2005). *Turkish: A Comprehensive Grammar*. New York: Routledge.
- Good, Jeff and Yu, Alan (2005). Morphosyntax of two Turkish subject pronominal paradigms. In Lorie Heggie and Francisco Ordóñez (eds.) *Clitic and Affix Combinations*. Amsterdam: John Benjamins. 315-341.
- Hagstrom, Paul (1999). The movement of question particle.
<http://www.bu.edu/linguistics/UG/hagstrom/papers/NELS30-Qmmt-handout-1>

⁶ ただしトルコ語キプロス方言とアゼルバイジャン語の違いとして、Demir (2009)はアゼルバイジャン語では強勢を受ける部分が長く発音されるが、キプロス方言ではそのような長音化がないということを指摘している。

2.pdf (5 December, 2013)

- Hayasi, Tooru (1984). The non-cooccurrence of the interrogative word and particle in Turkish. *Asian and African Linguistics* 13. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. 61-74.
- 金水敏 (2013)「日本語疑問文研究の課題」。「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」(於: 国立国語研究所) 研究集会発表資料.
- Kornfilt, Jaklin (1997). *Turkish*. London: Routledge.
- 野田春美 (1995)「～ノカ?、～ノ?、～カ?、～ø?」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(上)単文編』. 東京: くろしお出版.
- 佐藤久美子 (2013)『小林方言とトルコ語のプロソディー——型アクセント言語の共通点——』. 福岡: 九州大学出版会.
- 田窪行則 (2011)『日本語の構造——推論と知識管理——』. 東京: くろしお出版.
- Uzun, N. Engin (2000). *Evrensel Dilbilgisi ve Türkçe (Universal Grammar and Turkish)*. İstanbul: Multilingual.
- 吉村 大樹 (2012)「トルコ語とウズベク語の疑問接語 mI/mi の文法的ふるまいについて」. 吉村大樹(編)『チュルク諸語研究のスコープ』. 広島: 溪水社. 91-120.
- Yoshimura, Taiki (2012). The position of the interrogative clitic in Turkish: a Word Grammar account. In Kincses-Nagy, Éva and Biacsi, Mónika (eds.). *The Szeged Conference. Proceedings of the 15th International Conference on Turkish Linguistics held on August 20-22, 2010 in Szeged*. Szeged: University of Szeged. 593-602.
- Yoshimura, Taiki (2013). The Position of the Interrogative Clitic in Turkish Revisited: A Word Grammar Account. In Yaguchi (et al.). *Kyoto Working Papers in English and General Linguistics Volume 2*. Tokyo: Kaitakusha. 45-72.
- Yücel, Özge (2012). What moves where under Q-movement? In Kincses-Nagy, Éva and Biacsi, Mónika (eds.). *The Szeged Conference. Proceedings of the 15th International Conference on Turkish Linguistics held on August 20-22, 2010 in Szeged*. Szeged: University of Szeged. 603-616.
- Zimmer, Karl (1998). The case of the errant question marker. In Johanson, Lars (ed.).

The Mainz Meeting: Proceedings of the Seventh International Conference on Turkish Linguistics. Harrassowitz Verlag, Wiesbaden: 478-481.